

SC・SSW (2)事例から考える

ここでは、ゲームネット問題の事例について取り上げていきたいと思います。ここには、ある高校1年生のゲームネット依存症が疑われる男の子が登場します。その後の経過で、その子を取り巻く家族の動きであったり、それに対応してきたスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、学校の動きというところにも注目して頂きながら、実践的、具体的に対応を考えていただけたらいいかなというふうに思っております。このような事例は、実際に起こった事例ではない架空事例なんですけど、いろんな事例をつぎはぎして作った事例ですね。このような形で相談に上がってくるケースが多いので、そのような意味でもぜひご参考にさせていただけたらと思います。あと、この動画の次にご紹介しております、ゲームネット依存症に関する動画の中でも、この事例に沿いながら、解説しておりますので、それも踏まえて、今回の事例を是非味わっていただけたらいいかなという風に思います。では読み上げていきますので、ぜひ一緒に事例をご検討いただけたらと思います。

次行きます。経過です。この子が、中学生から高校生に上がると、急に勉強についていけなくなりました。進学校で、結構勉強が難しい学校を想定していただけたらと思います。小中学校からゲームはやり続けていたのですが、小中学校の頃は部活をやっていたのですが、コロナの影響もあり、部活もなくて、大体1学期終わりぐらいから家に帰ってからはずっとオンラインのゲームにはまるようになっていきました。生活のリズムも崩れて部屋から出てこないで、そこに見るに見かねたお父さんが、ゲームを取り上げたり、WiFiを切ったり、結構思い切ってやってみたものの、ご本人は怒り出して、喧嘩になったり、そのようなところで、ほとんど手を焼いて、お母様もお父様もどう対処していいか分からない状態になってしまいました。少しそのような険悪な関係もずっと続いていた中で、食事する時も、初めは一緒に食べていたのですが、ずっとスマホを見てるばかりで、何かを話しかけたとしても、イライラした様子であまり会話も弾まず、ちょっとした緊張感も漂うようになっていて、食事も一緒にしなくなってしまいました。そのような姿を見ていて、親としては不安が募ってきて、すごく本人に気を使うようになっていきます。怒らせないように怒らせないように気を使うかんじです。声をかけたとしても拒絶的反抗的な態度で、どうしていいかわからない感じで、そんな中で学校も休みがちになっていき、とうとう不登校になってしまいました。お母さんもすごく心配で、本人がそういった様子なのであまり会話もできず、部屋にはずっとこもってる状況。部屋から聞こえてくるのは、誰かとヘッ

ドセットをつけてチャットをしているのか、ゲームの中なのかわからないけれども、「死ね」とか「くそ」とか「ざけんな」とか、結構な暴言が目立ち始めてきています。事態が悪化しているように見えてきたこの状況で、親としても誰に相談していいかわからず、困惑をしていたというような経過です。

この家族の背景についてまず解説していききたいと思います。家族構成として、お父さんお母さん、ご本人、高校1年生です。弟くんもいますね。小学校5年生です。四人家族です。お父さんは会社員でお母さんもパートで短時間勤務されています。特に、経済的な困窮はありませんでした。お母さんは困って、学校に相談して、教員の事は信頼しています。特に不登校になってからは、欠席のご連絡も含めて、担任の先生とどうしようかなんてお話もしていたりしました。そこでは信頼しているし、学校もすごく協力的な感じですね。ただですねお父様は、お子さんに対して、特に本人に対して教育に関しては厳しく、成績が下がると子供たちのことを叱ったりとか、不機嫌になったりとか。時にはですねお母さんに対しては。「お前のせいだ、お前がちゃんと教えてないからだ」と、お母様も責められたりする様子も見え隠れしていました。お父さんとお母さんはあまりコミュニケーションが取れておらず、そのようなところもお母様もお子さんの事、特に長男の事は話しあえていないという状況です。本人は中学校までは成績は優秀で、部活はサッカー部で3年間こなしていました。中学校時代小学校時代も含めてですが、友人も多く対人関係のトラブルは特にはなかったというところですよ。

学校の方からの視点で見たいと思います、しばらく欠席が続くようになり、結果として不登校になっていくのですが、お休みがちになっていました。休みがちになり始めたあたりから、保護者から担任に、お休みの連絡が入っていくのですが、そうすると、また担任が、スクールカウンセラーをつなぎ、担任からの提案で、スクールカウンセラーと保護者をつないでいきました。お母さんも、すごく困っていたので、是非というところでスクールカウンセラーと学校の教育相談室で会っています。スクールカウンセラーがお母様とお話を聞く中でですね、もうしばらく継続してご本人の様子、今後の対策を立てていこうという事で継続面接が始まり、主としてお母様の相談はスクールカウンセラーが受け持っていくという形になっていきました。カウンセラーの方からは、本人の生きづらさの理解、学校に行く行かないではなくて、本人の生きづらさがどんどころにあるのかというところに焦点を当てながら、面接を開始し

ております。そういった内容で、保護者に許可を得ながら、スクールカウンセラー、教員、保護者で情報共有を常々行なっておりました。面接で語られる本人の様子であったり、来る来ないとかですね、勉強するしない、ゲームするしないでなくても、彼がお母様から見て率直にどのような生活をしてるのか、どのように映っているのかとかで、率直な思いを聞いていく中で、本人の情報共有をしていきました。そんな中で、お母さまの語りの中からは、自分の育て方が悪かったとか、私が勉強を押しつけすぎたせいで、本人は実はすごく苦しかったんじゃないかなってというような罪悪感が語られ始めています。その時にスクールカウンセラーは、誰が問題なのかとかいった犯人探しや、問題・原因を探すのではなくて、率直に、お母さんから見た本人像を語ってくださいというところで、一緒に対話をしていきながら、本人の理解、時にはスクールカウンセラーの方からのアセスメントも伝えながら、そこからお母さんの理解も深まっていき、ご本人の理解を深めていきました。そうするとお母さんも自身の振り返りや、ご本人周辺の家族の課題も一緒に見えてみました。関わり方であったりとか、あとはご本人の成長に踏まえた、家族内の変化です。そのように理解が深まっていく中で、スクールカウンセラーの中でも、ご本人にアプローチをしていく上、彼の理解をネットワークとして広げていくためにも、スクールソーシャルワーカーの介入をお母様に提案していきました。お母様も、その辺は快諾して、スクールカウンセラーの方からですね、担任管理職を通してスクールソーシャルワーカーを依頼して行きます。学校で、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーで顔合わせをして行きました。1回目はお話をして、今度はスクールソーシャルワーカーの方から自宅訪問のご提案がありました。家でお話が聞けたらいいかなというところが目的ですが、上手くいかなければ、玄関先でも構いませんとのことで、自宅訪問の提案を受けました。そこも、お母さんも含めて、ご両親もそれで OK ということでしたので、訪問を開始して、しばらくは玄関先でお会いしたりと、本人も登場することも、部屋から出てこなかったりということも続いたんですが、しばらく続いていく中で、本人が降りてきたり、来ないながらもお母様お父様にスクールソーシャルワーカーでグループ面接を実施して行きました。でも、本人も登場して、最終的にはお母様お子さんご本人とお父さんとスクールソーシャルワーカーの四人で面接を行ったという経緯もあります。

続いての経過です。スクールソーシャルワーカーさんが気づいたのが、実際に話してみても、お母様から語られる様子よりも、ちょっとその他のズレがあるかなということ

ころです。話を聞いてみると本人像がよく見えてきたりして、本人が、どうせ僕はどうか、どうせみんなはそう思っているだろうと、被害的な言動が見られるので、医療の緊急医療受診の緊急性、特に統合失調症の前駆症状がご心配だったので、スクールソーシャルワーカーから、精神保健福祉センターに連絡を入れました。スクールソーシャルワーカーから、アセスメント、見立て、あとはこれまでの情報と状況を伝えて、一旦、センターのスタッフと相談していきながら、緊急性はないというところの判断だったので、継続して面接、自宅訪問での面接を行っていました。引き続き、お母さんは教育相談の方でスクールカウンセラーとも面接を行っております。家での様子であったり、お母さんとの話。もちろん、許可を得ながら、情報共有をして教員や管理職も含めて、理解を深めています。で、一度またお会いして、全体で話し合ってみませんかという中で支援会議を実施して、それぞれの関係者であったり、ご両親が見えてきたこととか、情報共有していきながら、あとそれぞれの役割も確認していきながら、本人の理解と、対応の在り方を模索していきました。そしたら、彼が、学校に行きづらくなってしまったその背景に、やはり何かしらの生きづらさがあり、勉強の仕方が急が変わってしまった辺りから、すごく苦しくなりました。そのようなところで彼の勉強の仕方には、発達の違い、発達障害の可能性もかいま見えてきて、再びスクールソーシャルワーカーさんから精神保健福祉センターに連絡して医療機関を紹介して頂きました。若干依存症の可能性もあったので。アディクションの専門的な病院も合わせて紹介していただいて、受診につながったという経緯です。本人にグループ面接を実施するには至っていたんですが、最初は病院に行くことに関しては、抵抗を示していたのですが、心理検査をする理由であったり、やはり彼の生きづらさがその背景にあたりして、実はそこですごく苦勞しているのではないかとこのところで、心理検査を実施することによって、将来的にはその自分自身の勉強のあり方とか、その苦勞、そこでの困難、見通しが持てる可能性がある、というところを紹介して、本人も病院の方に受診することを引き受けて、実際に診察を受けて検査を受け、教員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、両親、本人、医師そして病院の心理士との理解で、回復のネットワークがさらに広がっていきました。医療に行くことによって、医師による診断、診察、診察医師による見立てや、病院心理士との見立ても共有されていきます。それも踏まえてこのネットワークの中で、共有していきます。

保護者が、担任とスクールカウンセラー、本人が外部機関医療とも繋がっても定期

的な診察と、医療の方の心理士さんと、定期的にお話ししていくというところは始めて行きました。そこからさらに、病院とスクールカウンセラーさんと、連携をとるようになって行き、病院での様子、学校での様子というところもお伝えしていきながら、本人の理解がさらに深まっています。この理解のネットワークが広がってくることで、学校でできることを振り返っていき、あとは保護者としての関わり方、保護者の関わり方も振り返っていき、生活の中での回復環境が、だんだんだんだんと整えられていきました。関係者の中で本人の理解が深まることで、本人も、分かってもらえているという感覚が増してきたのか、少しずつ勉強するしないとか、学校行く行かないという話題ではなくて、実は、なかなか友達との付き合いというのが難しかったとか、部活に入ってみたものの、本当は部活というところも勉強ありきで勉強できていなかったらなかなか、付き合いづらいのではないかという、彼は若干被害的なので、部活には入ってみたものの、なかなか勉強がうまくいってない自分自身がみんなと足並みを揃えてみんなと同じ話題の中で、関わるのが難しいという後ろめたさを感じていたとかですね、そういった生きづらさが語られるようになっていきました。さらに、スクールソーシャルワーカーの訪問にて、家庭での対話が促されて行きます。次第にこういった生きづらさが率直に話せるようになっていきましたので、当然その話をお母さんだったり、お父さんがいる時には、お父さんが聞いたりとか、お父さんがそれに対して何か指示してアドバイスするのではなくて、お父さんが普段どんなことを感じているか、どんなことを思っているのかなんてところも聞くことで、本人にもお父さんの気持ちを少しずつ理解していたり、家庭の中での対話が促されてきました。スクールカウンセラーは学校の相談室にて相談を継続しています。スクールカウンセラーが間に入って、担任であったり管理職であったりとか情報共有も継続しています。本人の困りごとを、家族学校で共有する事ができて、そこで、実はその夫婦間で、お母様も困窮されていた、という話も、だんだん家族の課題も明らかになっていき、それぞれが、それぞれに取り組むようになって、学校も、関わり方、学校の出来ること出来ないこと、限界を踏まえた上で、役割も明確にしていきながら、学校、家族全体のあり方が変化し始めていったようなケースです。

いかがでしたでしょうか。以上のようなケース、これ本当によくあるようなケースだったりしますし、このような形で、家族関係が変わり、そして本人も生きづらさが明確になっていて、それについて家族全体でこう取り組んで行ったり、すでに理解のネットワークがつながっているのですぐに彼の依存先が出来上がっている状況で

す。これに困ったら病院の先生に聞いてみようとか、担任の先生に聞いてみようとか、彼が生きづらさを一人で抱え込むのではなくて、依存先をたくさん作ることによって彼の生きやすい生活環境が整っていったという風に言えるかもしれません。